

博物学研究 その2

～置き薬のいろいろ～

川瀬 基弘

愛知みずほ大学人間科学部人間環境情報学科

1. ケロリン

「ケロリン」と聞いて、銭湯の黄色い湯桶やテレビCMを思い浮かべる人は多いと思いますが、ケロリンとは、中外薬品株式会社の頭痛・歯痛・生理痛・神経痛薬、つまり解熱鎮痛剤のことです。解熱鎮痛剤は、脳の中樞神経に働きかけて痛みの伝わる回路を抑えたり、熱を下げたりします。これにより風邪にともなう発熱、頭痛、関節痛、筋肉痛のほか、生理痛、腰痛、歯痛など、痛みの場所や原因にかかわらず効果を発揮します。ケロリンは今日でも風邪薬として薬局などで売られていますが、その歴史は、大正14年までさかのぼります。

ところで、ケロリンという呼び名は、親しみ深いような、可愛いような、面白いような印象を受けますが、名前の通り風邪や痛みがケロッとなおるところか付けられました。他にも古い時代の配置薬のネーミングは興味深いものがたくさんあります。トンプク、六神丸、セメンエン、救命丸、健通丸、ヘブリン丸、仁丹、千金丹、ホルトス、熱病丸、實母散、一角丸、中将湯、百毒消し、ナオル丸、胃腸散、鯉膽丸、鎮痛散、風頓、セキトール、セキトルミン、子供散、イタミチール、ピタリ、ワンツー、トレル散など、ネーミングに技有りと言ったところでしょうか。今でも使われている名称も少なくありません。似たような薬が出回れば、ネーミングだけでなく、パッケージのデザインも多様化します(図1)。図1には、おもに昭和時代の配置薬の様々なデザインを紹介しました。

2. 配置薬のはじまり

「配置薬」は「置き薬」とも呼ばれ、300年以上も前から現在でも便利に使われている「先用後利」とよばれていたものです。今日のクレジットとリースを合併させたようなものです。つまり、利用者は各種の薬をいつも手元に置いておくことが出来、使った分だけ支払えばよく薬局へ出かけていく面倒もありません。現在では、プラスチック製の箱や金属

製の箱に入った配置薬を常備している家庭や会社もあるようです。

ところで、この配置薬の歴史は元禄時代までさかのぼります。1690年に江戸城で、三春藩主の秋田河内守が腹痛を起こし、そこに居合わせた富山藩二代目藩主の前田正甫が、常備薬の反魂丹を与えたところたちまち痛みが治まりました。これをきっかけに諸国の藩主たちは、反魂丹を売り広めるように前田正甫に頼み、これが配置薬販売業の発祥とされています。

今日では配置薬のケースは、プラスチック製や金属製が主流のようですが、昭和時代に用いられた配置薬を保管しておいた預け箱は、木製や紙製でした(図2)。更に大正時代や明治時代には、預け箱ではなく、預け袋と呼ばれる紙袋が使われていました(図3)。預け袋のサイズは縦が30~40cm、横が25~30cm程度です。特に大きさの規格はなく、袋毎に少しずつサイズが異なるのが特徴的です。裏面には、中に入れられている配置薬の種類と金額および使用個数を記入する表が印刷されています。

これらの預け袋や預け箱には、配置薬業者の名称とその所在地が明記されています。無作為に選んだ預け箱や袋の会社所在地を見ると、富山県に劣らず奈良県が数多くあります。「くすり」と言えば、「富山の薬売り」は全国的に有名です。配置薬販売の発祥は1690年の富山ですが、それに続いて1730年に奈良、滋賀、佐賀でも配置薬販売が始まり、有名な配置薬を数多く生み出しています。

3. ダルマのパッケージ

図1に示したように、配置薬のパッケージデザインには実に多様な絵が描かれています。ランダムにデザインを見わたすと、様々なパッケージの中でも、ダルマ、乗り物、クマ、布袋、男女、動植物、紳士、美人、鬼などがひととき目を引きまします。ここではデザイン別に2つのグループを紹介したいと思います。1つ目はダルマ(だるま)のパッケージです。実

際に服用する1回分の薬が入った小袋を図4に集めてみました。これらの小袋は、預け箱(図2)や預け袋(図3)に直接入っているわけではありません。これらの小袋が5包程度まとめて、中袋(図5)に入れられ、いろいろな種類の中袋が、預け箱や預け袋に収められていました。

ところで「だるま」とは何でしょうか。縁起物としての置物や貯金箱のダルマ、だるま落とし、だるまさんがころんだ、だるまストーブ、だるま弁当など、ダルマから派生したものは数多くあります。ダルマは漢字で「達磨」と記し、仏教の一派である禅宗の開祖とされる人物であり、達磨大師や菩提達磨とも呼ばれています。「ダルマ」はサンスクリット語で「法」を表す言葉だそうです。玩具の1つに「起き上がり小法師(おきあがりこぼし→おきあがりこぼし)」というのがありますが、何度でも起き上がる様子を、達磨大師が面壁九年という座禅をした逸話にちなんで、達磨の顔が描かれるようになったと言われています。ダルマの色が赤いのは、達磨大師が赤い衣を着ていたことに由来するそうですが、赤色には魔除け効果があると信じられていたことや、天然痘を引き起こす痘瘡神が赤色を嫌うと信じられていたことに由来するという説もあります。つまり、薬のパッケージには持ってこいだったというわけです。病気で倒れてもすぐに起き上がるという発想から用いられたのでしょう。赤色がひときわ目立ち、様々な表情のダルマも親しみやすかったのではないのでしょうか。

次にダルマの描かれたパッケージのネーミングに注目してみましょう(図4, 図5)。ホームラン、風ケロリ、ピラミン、トンブク、サット、熊膽丸など、あなたならどのパッケージを手にするでしょうか。これらの名称の中でもひときわ目立つのが「トンブク」です。最近では医療関係者以外にあまりトンブクという言葉を使わなくなったようです。トンブクは「頓服」と記し、分服ではなくその時一回に服用すること、また、その薬剤、という意味があります。つまり必要なときにだけ服用すればすぐに効く解熱鎮痛薬です。実際に、ダルマを図柄とした薬の大部分は解熱鎮痛薬です。

薬のパッケージを裏返すと、そこには、有効成分、主治効能、用法用量、価格、製造会社とその所在地などが明確に記されています。様々なダルマ薬に記載された効能は、胃腸カタル、吐き下し、胃腸痛、食あたり、水あたり、流行性感冒・感冒・頭痛・偏頭痛・神経痛の解熱鎮痛、ひきかぜ、熱さまし、ロイマチス性疼痛・急性鼻カタルの解熱鎮痛、咳、麻疹、のぼせ、たんせき、などです。そして共通する

のは、解熱鎮痛作用です。また、総合感冒薬として作られたものも多いようです。総合感冒薬とは、風邪の三大専門薬とされる「解熱鎮痛剤」「鎮咳去痰剤」「鼻炎剤」の成分をまんべんなく含んだ薬です。

ではこれらの総合感冒薬や解熱鎮痛薬にはどんな成分が含まれているのでしょうか。有効成分も裏面に詳細に記されています。アセトアニリド(アンチフェブリン)、硫酸キニーネ、カフェイン、フェナセチン、アセチルサリチル酸(アスピリン)、塩酸エフェドリン、ブロムワレリル尿素、ロートエキス、塩酸キニーネ、アミノピリン、エテンザミド、スルピリン、塩酸ジフェンヒドรามミン、リン酸ジヒドロコデインなどを成分としています。現在でも主流に使われている成分もあれば、あまり使われなくなった成分も見られます。例えば、今日の風邪薬にもよく含まれている非ステロイド性抗炎症薬(NSAIDs)のアスピリンには、解熱作用、鎮痛作用、抗炎症作用があります。非ステロイド性抗炎症薬としては、他にインドメタシン、イブプロフェンなどがあります。鎮咳作用のあるコデイン、抗ヒスタミン薬のジフェンヒドรามミン等いずれも重要な成分ですが、それぞれに作用と副作用が少しずつ異なりますので、薬を選ぶときに参考にもなります。

レトロな薬袋は、パッケージのデザインやネーミングだけを見ているだけでも十分に楽しめますが、裏面の効能、成分、価格などを詳細に調べていくと、配置薬の歴史と移り変わり、さらには当時の流行病や物価の変動などの時代背景までも知ることが出来ます。

4. セメンエン

もう何年も前に犬を散歩に連れて行き、糞をとろうとしたときに、糞の中でたくさんの白い虫が体を動かしていたのを今でも鮮明に覚えています。ずいぶん驚きあわてて帰宅すると、祖母に「むしくだし」を飲ませたからだよ、と落ち着いて言われました。そのとき初めて、蟻虫と呼ばれる虫がこれなのかということを知りました。さらに驚いたのは、昔は多くの人の体の中にも回虫などの寄生虫がいたと聞いてゾッとしました。もちろん昔ほどではないものの、今でも体の中に虫を飼っている人は沢山います。虫と言ったり寄生虫という言い方そのものが、汚いイメージや悪いイメージを与えてしまいがちですが、人間にとって必要な虫も沢山います。つまりは、人間の体の中で人間と共生し、持ちつ持たれつのか関係を保っています。しかし、寄生虫であれ、共生虫であれ、極めて衛生条件が良くなった日本では虫を体内に持っている人は激減したと言われています。小

学校の時に検便の検査をしたことを今でも覚えています。駆虫薬を飲んだ記憶はありません。しかし人の体内から虫が消えたことで、アレルギー体質の人が増えているという研究もあります。統計的に、実際に花粉症にならない人の大部分の人は、体内に虫を飼っているようです。一方で体内が綺麗すぎて虫がいない人ほど花粉症になりやすいと言われていきます。これが本当なら、この虫は寄生虫ではなくアレルギーから体を守ってくれる重要な共生生物ということになるでしょう。

少し話が逸れましたが、一昔前、日本が今ほど衛生的でなかった時代に人の体内の虫を退散させるのに用いられたのが、駆虫薬のセメンエンなのです。おそらく昭和の初期から中期にかけては、セメンエンが不可欠であったでしょう。その証拠に当時の配置薬を集めてみると、実に様々なセメンエンやその類似品があります(図6, 図7)。パッケージのデザインは、先ほどのダルマの描かれた解熱鎮痛薬や総合感冒薬に比べると、かわいらしさはなく、むしろ不気味な虫が描かれていたり、虫を観察するための顕微鏡が描かれているのが特徴的です。パッケージの虫の絵は、一点一点をみるととてもこの世のものと思えないような不思議な虫まで描かれています。こんな虫が自分の体の中にいたら・・・、と考えると、このパッケージのサントニン飲んでみようかという気になったのかもしれませんが、パッケージのネーミングやデザインは言うまでもなく販売戦略の一つでした。

図6, 図7のパッケージのいくつかには「サントニン主剤」と記されています。サントニンは駆虫薬の一種ですが、その前に寄生虫について少し紹介します。駆虫薬とは、寄生虫のうちで原虫類を除く蠕虫類を駆除する薬です。蠕虫類は、おおまかに線形動物と扁形動物に二分され、前者には回虫、蟯虫、鉤虫、糞線虫、鞭虫、糸状虫(フィラリア)、後者には包虫、肺吸虫、肝吸虫、日本住血吸虫などがいます。この中で、回虫、蟯虫、鉤虫に効果を発揮するのが、サントニン、カイニン酸、ピペラジン塩、パモ酸ピランテルなどの薬品です。薬品名であるサントニンを主成分とした駆虫薬が、セメンエンという商品名でその名を日本中に広めました。用いることはあまりないかもしれませんが、今でもセメンエンという虫下しの薬は販売されています。

昭和の配置薬のセメンエンをもう少しみていくことにします。パッケージの裏面にはダルマ風邪薬と同様に、有効成分、主治効能、用法用量、価格、製造会社とその所在地などが記されています。効能には、蛔虫・蟯虫・鞭虫の駆除と書かれたものがほと

んどです。成分には、サントニン、ピサチン、タウリン、デンブン、ベルタン、カイニン酸と記されていますが、ほとんどのものにサントニンが使われていました。

6. おわりに

以上、配置薬に関するほんの一部分を紹介したに過ぎませんが、今では使用期限が切れて服用することが出来なくなった配置薬も、博物館資料としても貴重であることがわかります。江戸時代からの売薬業にかかわる様々な資料を展示公開している「くすり博物館」や「くすり資料館」も実在します。最近では、レトロなデザインが若い人のあいだで人気になり、デザイン復刻版の薬が販売されていることがあります。大型のドラッグストアが建ち並ぶ世の中になりましたが、配置薬が今も健在なのはその便利性に違いありません。

前号で紹介しましたように、ここで紹介した配置薬も本学で博物館学芸員資格を取得するカリキュラムの中での、博物館研究資料の一部として有効利用していきたいと考えています。

5. 参考文献

- 赤羽悟美(2004)薬のしくみ. ナツメ社.
- 藤田紘一郎(2005)「万病」虫くだし. 廣済堂.
- 今井昭一著(2006)よくわかる専門基礎講座 薬理学. 金原出版.
- 加藤三千尋(2003)決定版「名薬」探訪. 同時代社.
- 町田忍(1993)懐かしの家庭薬大全. 角川書店.
- 岡崎寛蔵(1976)くすりの歴史. 講談社.
- 宗田一(1993)日本の名薬. 八坂書房.
- 鈴木和(2005)日本の伝承薬 江戸売薬から家庭薬まで. 薬事日報社.
- 高橋善丸(1998)お薬グラフィティ. 光琳社.
- 田中越郎(2004)イラストでまなぶ薬理学. 医学書院.
- 植松俊彦・野村隆英・石川直久(1994)シンプル薬理学. 江南堂.
- 渡辺泰雄・梅垣敬三・山田静雄(2004)クスリのこと かわかる本. 地人書館.
- 山崎光夫(2004)日本の名薬. 文藝春秋.
- 柳澤輝行・丸山敬(2004)イラスト薬理学. 丸善.



図1. 昭和時代の配置薬.



図2. 昭和時代に用いられた配置薬を保管しておいた木製や紙製の預け箱.



図3. 明治、大正時代に使われていた配置薬の預け袋(昭和期のものも含む).



図4. 服用1回分の薬が入った小袋(長径約9 cm×短径約6 cm)



図5. 小袋を5包程度まとめて入れてある中袋(長径約 14 cm×短径約 10 cm)



図6. 虫下しの薬が入った小袋(長径約9 cm×短径約6 cm)



図7. 虫下し薬の小袋を5包程度まとめて入れてある中袋(長径約 14 cm×短径約 10 cm)